

序論)

みなさんは教会に来るのが面倒に思ったり、礼拝を捧げるのが億劫に思ったりしたことはないでしょうか。私は小さいころから牧師家庭で育ち、教会にいるのが当たり前の生活を続けていましたから、ある意味で教会自体が私の家のようなものでした。

それでも友達が日曜日に遊んでいるのを見たり聞いたりしたときや、社会人になって仕事が忙し過ぎたりしたときに、日曜日、教会にいつて礼拝するのが面倒に思うことがありました。

今日のみことばはある意味でそのような人々に対するみことばです。

背景と文脈)

既にみてきたようにイスラエルは神様から様々な恵みを与えられてきました。まずは神の民として選ばれた恵み、そして、出エジプトという救いを経験させていただいた恵み、さらには律法という神の民としてどのように生きてらよいかを教えるガイドラインが与えられる恵み、そして、事あるごとに神様からの御言葉が与えられ、実際的に助けられてきた恵みをイスラエルは受け続けてきたわけです。

だから、イスラエルが神様を礼拝し、神様と共に歩み続けることができるというのは、それ自体が大きな恵みなのでした。

しかも、この43章では、【主】に逆らい続けるイスラエルに対して、神様が「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。(4節)」と言われて一方的に与えられる【主】の愛を教えてください、さらにはあの出エジプトの救いよりも更に素晴らしい救いのことを「荒野に水を、荒れ地に川を流れさせる(20節)」という表現で教えてください、【主】が、イエスキリストによって永遠のいのちの水を飲ませてくださるといふ約束をしてくださいました。

神様は、選びの民イスラエルに出エジプトや律法という恵みを与えただけじゃなくって、罪を犯していてもなお愛され、永遠のいのちに至る水をくださるといふ究極的な救いをも用意してくださっていたのです。

みなさん、この神様を礼拝すること、この神様に自分のすべてを委ねていくことは面倒なことなのではないでしょうか。私達にとって損になるようなことなのではないでしょうか。

いいえ。決してそんなことはありません。この恵みの【主】を礼拝し、この恵みの【主】に自分のすべてをお委ねすることは、感謝なことであり、本来、私達にとって喜びとなる出来事なのです。

ところが、イスラエルはどうだったのでしょうか。22節を読みましょう。

1) 【主】を求めないイスラエル

43:22 しかし、ヤコブよ、あなたはわたしを呼び求めなかった。むしろ、イスラエルよ、あなたはわたしのことで疲れ果てた。

新共同訳の「あなたはわたしのことで疲れ果てた」という部分を見てみると、「あなたはわたしを重荷とした。」となっています。

イスラエルはこの恵みの【主】を呼び求めて、この恵みの【主】に心からの礼拝を捧げることを重荷としたのです。面倒くさがったのです。イヤイヤ礼拝をしていたのです。だから、神様はイスラエルの礼拝姿勢をなんと知っているかということ、23節、24節

43:23 あなたはわたしに全焼のささげ物の羊を携えて来ることはなく、いけにえを献げてわたしをあがめようとしなかった。わたしは穀物のささげ物のことであなたに苦勞をさせず、乳香のことで、あなたを煩わせてもいない。

43:24 あなたはわたしのために、金で菖蒲を買わず、いけにえの脂肪で、わたしを満足させなかった。かえって、あなたの罪でわたしに苦勞をさせ、あなたの咎でわたしを煩わせただけだ。

これは物理的に全焼のいけにえをしなかったとか、穀物のささげものや、乳香や菖蒲をつかった礼拝をしなかったということではありません。イスラエルはその歴史において一応、そのような生贄や礼拝はしていたのです。23節で「わたしは穀物のささげ物のことであなたに苦勞をさせず、乳香のことで、あなたを煩わせてもいない。」といわれているように、神様はイスラエルがそういった礼拝をできないような状態にはさせなかったのです。アッシリアやバビロンに責められながらも、【主】を礼拝できる環境を整えておられたのです。

でも、イスラエルは神様に対してまことの礼拝をささげていませんでした。形式上は全焼の生贄を捧げていたとしても、その使っている生贄は汚れた生贄であったり、菖蒲や乳香などの香りの捧げ物の中に混ぜものをいれていたり、恵みの【主】に対して誠実な礼拝、自分の最善を尽くした礼拝を捧げていなかったのです。

そればかりか、彼らはその罪によって【主】に苦勞させ、その咎によって【主】を煩わせたのです。

わかるでしょうか。【主】に対する感謝や【主】を崇める思いの伴わない形だけの

不誠実な礼拝を捧げられながら、「神様、この罪を赦してください」「あの咎を赦してください」と罪の報告だけを聞かされる神様の気持ち。もし皆さんがそんな礼拝を捧げられる神様の立場だったらどう思われるでしょうか。

【主】への礼拝を面倒くさがる人々が、自分たちに都合のいい赦しだけをもとめてくるのを見た時、もし私が神様の立場だったら、「お前たちなど知らない。」そうゆうふうについて見捨ててしまうと思います。

みなさん、みなさんの礼拝、そして、私の礼拝は【主】の前でどのような礼拝でしょうか。みなさんは、そして、私は【主】を礼拝することを面倒に思って、形だけはこの教会に集って礼拝をしているけど、実際は【主】への感謝や、【主】を崇める思いがともなっていない礼拝をささげていることはないでしょうか。

【主】を礼拝するために、時間を聖別し、仕事を調整し、最善の自分を【主】の前に整えて、感謝と喜びをもって【主】を賛美し、心から【主】を崇めているでしょうか。それとも、そのような献身はせず、自分にとって都合のよい罪の赦しだけを求める礼拝をしているでしょうか。

もし、私達がイスラエルのような礼拝をしているのならば、【主】にとって重荷となり、煩いとなる礼拝をしてしまっていることになるのです。

2) 赦しの宣言

みなさん、それでも【主】は驚くべきことを言われます。25節を読みましょう。

43:25 わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたの背きの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。

恵みの【主】に正しい礼拝を捧げないイスラエルに対して【主】はなんと言われていますか？「あなたの背きの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない」と言われています。なぜでしょうか？ 【主】ご自身のためです。

聖書をよく調べてみると、この25節の赦しの宣言は、前の文脈と完全に切り離されている形になっています。イスラエルは恵みの【主】に対して正しい礼拝を捧げていませんでした。でも、そんなイスラエルの不誠実さ、献身のなさに関係なく、一方的に【主】はご自身の存在ゆえに罪の赦しを宣言されているのです。

これは【主】が本質的に赦しの神様であることを示しています。

みなさん、【主】は私達が【主】へ正しい礼拝をできていなくても、【主】の恵み

に対して献身という形で応答をすることができていなくても、それでもご自身の赦しの性質のゆえに、私達の罪を拭い去り、私達の罪を思い出さないようにして下さるお方なのです。

みなさん、神様がこのような赦しの本質をもっておられるお方だからこそ、【主】イエスキリストは私達が悔い改める前に、私達のために死んでくださったのです。ローマ人への手紙にはこのようにあります。

5:6 実にキリストは、私たちがまだ弱かったころ、定められた時に、不敬虔な者たちのために死んでくださいました。

5:7 正しい人のためであっても、死ぬ人はほとんどいません。善良な人のためなら、進んで死ぬ人がいるかもしれません。

5:8 しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。

みなさん、【主】はその赦しのご性質のゆえに、そして私達への愛のゆえに、不誠実な私達の罪をキリストの死によって拭い去ってくださったのです。

だから、この赦しの神様に対する信仰は決して失望に終わりません。

ローマ人への手紙 5 章 5 節にこのように書かれているとおりです。

5:5 この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

3) 本来の裁き

みなさん、このように神様は私達が不誠実な礼拝、【主】への献身をしない者であったとしても、私達の罪を赦し、私達の罪を思い出さないでいてくださいます。

じゃあ、私達は不誠実なまま、【主】への献身をしない。【主】への本当の礼拝をしないものでい続けてもいいのでしょうか。【主】は 26 節のように言われています。

43:26 わたしに思い出させよ。ともにさばきに向かおう。あなたが正しいとされるために、あなたのほうから申し立てよ。

25 節で「もうあなたの罪を思い出さない」と言われているのに、26 節で「わたしに思い出させよ」といわれているのは、矛盾のように思いますが、これは神様が罪

を忘れてくださるといふ恵みがなかったとき、イスラエルに対する裁きはどのようなであったのかを知らせるための言い返しです。

神様はその赦しのご性質のゆえに、私達の罪を思い出さないでくださいますけども、でも、仮に【主】が私達の罪を思い出されていたのならばどうなるのか。ということですが。

神様が、イスラエルの罪、そして私達の罪を覚えておられたら、神様のさばきはどのようなでしょうか。【主】はイスラエルに対して「あなたが正しいとされるために、あなたのほうから申し立てよ」といわれます。

みなさんは神様に正しいと認めてもらえるための説得材料を持っていますか？恵みの神様に対して心からの感謝を捧げないこと、神様に自分のすべてを委ねないこと。その正当性を認めていただけるだけの理由を、私達は神様にいうことができるのでしょうか。もし、ここに礼拝をしないでいい理由を言うことができる人がいたら手をあげてください。

私の娘は、今日、運動会でこの場にいません。じゃあ、小学校の運動会があったということが、礼拝をしないでいい理由として神様の前に成り立つのでしょうか。成り立たないんですね。だから、彼女の父親である私は罪を犯していることになります。だから、私はこの運動会の時、いつも【主】に申し訳ない気持ちをもっています。でも、こういった罪は私だけでしょうか。いいえ。私だけでなくすべての人が犯しています。27節を読みましょう。

43:27 あなたの最初の先祖は罪を犯し、あなたの仲保者たちはわたしに背いた。

最初の先祖というのは、アダムのことか、モーセのことか、ヤコブのことか。人によって解釈がわかれますが、私はアダムのことだと思っています。最初のアダムから、人は神様の前に罪を犯し、そして、「仲保者」これは預言者とか、祭司のことですが、現代だったら私のような教職者が該当するでしょう。つまり、神様のみ心を知って人に伝える役割の人たちが【主】に背いてきたのです。

このようにして、最初の人から、【主】のしもべとして誰よりも【主】に仕えなければいけないものまで、人は【主】の前に罪を犯し続けてきました。

だから、本来そのような人たちが受けなければいけない裁判の判決というのとはどのようなものかということ、28節

43:28 それで、わたしは聖所のつかさたちを汚し、ヤコブが聖絶されるように、イスラエルがののしられるようにした。」

「聖所のつかさたちを汚し」というのは、【主】に聖別された者として扱われなければいけない【主】の奉仕者を、汚れた者としてみなされる。ということです。そして、「ヤコブが聖絶される」の「聖絶」とは神様の聖さのゆえに、動物から幼子にいたるまで完全に滅ぼしつくされるということです。そして、最後の「ののしられる」とは、侮辱されること、【主】に軽んじられることを意味します。

わかるでしょうか。【主】に不誠実な礼拝をし、【主】の前に罪を犯した私達は、本来汚れたものとみなされ、幼子にたまるまで滅ぼし尽くされ、【主】に軽んじられなければいけないのです。

でも、神様は私達のことを高価で尊いといわれ、私達に永遠のいのちの水を飲ませ、そして、「あなたの背きの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。」といてくださいます。

結論)

みなさん、この【主】に対して私達はどのように応答するべきでしょうか。私達の本来の判決を知り、そんな私達への【主】の赦しを知った上で、私達はどのような礼拝をするべきでしょうか。

聖書はこのように言っています。

ローマ人への手紙 12 章 1 節

ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。

からだを捧げるということは、私達の人生、私達の生き方を【主】に聖別して捧げるということです。具体的には神様の御心を実行していくことであり、先週いわれたように【主】の証し人として、【主】のことを宣べ伝えることであり、【主】の自分の時間や力、自分のすべてを捧げていくことです。

誤解しないでいただきたいのは、お金を捧げることや奉仕することだけが重要だということではありません。【主】に喜んでいただくために、自分の時間や力や持っているものを聖別して用いていくということです。

みなさん、まずはこの日曜日の主日礼拝を聖別しましょう。
礼拝のために時間を聖別し、自分の体を聖別し、そして、自分の心を聖別して【主】にささげていきましょう。

そして、日常生活の中でも、自分の生き方そのものを捧げていきましょう。【主】の栄光を現すために仕事をし、【主】の栄光を現すために家庭生活をし、【主】の栄光を現すために学校で学びましょう。

そのようにして、私達に恵みを与え、赦しを与えてくださった【主】に応答する者となっていきたいと思います。